2 FEBRUARY, 1987
昭和62年(1987年)2月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
毎月10日発行　第82号

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1987
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

灰の水曜日

灰の水曜日の典礼には、聖書の二つの言葉が記されてあります。

第一は、創世の書の「おまえはちりであって、ちりにかえるべきものである」(3・19)ということば。

二つ目は、聖マルコ福音書による「悔い改めて福音を信じよ」(1・15)ということばです。

それぞれ独自の内容をもち、それぞれが特有の仕方で教えを要約しています。教会は四旬節が始まるこの時期に、この二つの典礼様式の内容を受け入れるよう勧めます。

そこで私たちは、死についての真理、そしてこの世における人の堕落についての真理を受け入れるのです。また、有為転変を越えた生命についての真理をも。それはすなわち、神における永遠の生命、キリストが私たちを導いてくださる生命についての真理を受け入れることであります。

そしてこの二重の真理をもとに、回心せよとの呼びかけに応えるわけです。

これが今はじまる四旬節の中心かつ生命の源となりますように。

★

マテオ福音書を黙想しましょう。四旬節には私たち一人ひとり、「人間性」そのものについて考える義務があります。四旬節中、この点をほんとうに実生活にとり入れるべく、そしてもっともっと集中的に実行すべく努めなければなりません。神のみ前でありのままの自分をそのままあらわすよう努力しましょう。

「他人の前でよい業を行なって人に見せびらかさぬように気をつけよ。そんなことをすれば天にまします父からの報いはいっさい受けられぬ。」(マテオ6・1)

このように、四旬節は神が中心のとき、神を中心に人間をみつめる時期です。

★

四旬節中には根本的な三つの点を指針としなければなりません。この指針のうちに人の霊性、そして何よりも人の意志と自由とが説明されています。

「内に向かう」、すなわち「自己制御」にあたること。意志が人間の感覚に打ち勝つことです。これが私たちに必要な「断食」であります。

「上へ向かう」。ここにおいて私たちの霊魂は超越へと向けられる。これが祈りです。

「他の人々へ」の方向は、人間である私が「他の人」に心を開く道。これが慈善です。

この四旬節に、本日の福音のように、キリストが私たちに課された義務についてより深く考えなければなりません。言うまでもなくこの義務は、有機的に一人ひとりの人性に深く刻みつけられたものです。そして人が福音書の言う「自己達成」を得るためのプログラムに密接につながっているのです。

★

また詩篇50にもとくに注意を向けましょう。これはいわゆる償いの詩篇のうちもっとも有名な、広く用いられている詩篇です。その一部は本日の答唱詩篇にもなっています。全部知って、その全てを自分のものとしてとり入れる価値があります。

今そのうちの三つの節に注目してみましょう。とくに、償いと回心について明らかにしている部分です。

「清い心をつくり、新しい確かな霊を与えたまえ。」(詩篇50(51)・12)

神は「創造」され、人は「作り」出します。この時期に教会は、この無類の創造力を発揮するよう招いているのです。そして霊的に強い人間がこの創造により出現する。

詩篇作者は頼んでいます。

「救いの喜びを返し、寛仁な霊をもって私を支えたまえ」(同14)と。

自己の回心への努力で、喜びが得られます。これは創造的な仕事なので、それなりに払わなければならない代償があります。しかし、そうであればこそ、非常に大きな喜びをもたらしてくれるのです。

そして最後に、

「主よ、私のくちびるを開きたまえ、そうすれば私の口はあなたの誉れを語る。」(同17)

だれもこの見方なしに生きてゆくことはできません。「神の栄光は生きる人間」と聖イレネウスは言いました。神の栄光を語ることなく、真の意味で生きることは不可能なのです。神のほまれを語ることによってのみ、人間のもつ真の尊厳というものが表わされるのですから。

(一九八四・三・七)

病に伏す方々へ

私は役に立っているのだろうか？　そうです。皆さん方はそこに「居る」という事実だけで、確かに役に立っていらっしゃいます。匿名、技術、熱病の如き性急さ、生産高への異常な関心、すぐに経験できる楽しみを追求すること――これらが特徴となった今の世で、皆さんは、人間としての価値、内的生活、本物の人間関係の要求だけをもって存在しておられます。そのような皆さんを見て、世界は再び考え始めるのです。「何が本質的なものなのだろう？」「人生の意味とは？」「無私の愛とは？」「自己を考えるとはどういうことなのだろう？」等と。

皆さんが幸いにして信者なら、十字架につけられたキリストに目を向けるとき、世界には隠された偉大な秘義を深く洞察することがおできになるでしょう。キリストは、できるだけ大勢の人の病を癒した後、受難へと向かわれました。理由は説明せずに、御自ら苦しみを背負われたのです。これほど深く苦しみの神秘に入り込んだ方は外にありません。キリストにおいて、苦しみは愛に結ばれ、そして贖われた。苦しみは、それ

が捧げられたとき贖いの力を得、復活へと姿を変えたのです。キリストは、苦しみという根に贖いの力と希望の光を接ぎ木なさいました。このようなわけで、苦しむ人が信じる人であるなら、その人は消えない苦しみの試練の中で、沈黙のうちに贖いに一致するのです。丁度、十字架の下のマリアがそうであったように。

これは単に諦めてしまうことでも、運命だと観念することでもありません。なぜなら、医者の助けを受けて生きたいと願い続けることに変わりはないからです。ただし、旅立ちのときが来れば、神に生命をささげる覚悟もできています。愛を支えに生きているからです。このような心構えは神の賜ですから、私はぜひ皆さんにお願いしたいと思います。この賜を神に祈願してください。

ペトロの後継者としての私の職務、つまり、教会の忠実と一致をかためる仕事を効果的に果たせるのは、病に伏すみなさんの祈りと犠牲のおかげです。ですから、それを皆さんにお任せします。皆さんは私の心と祈りの中で大きな場を占めていらっしゃるのです。一九八四年二月十一日に『救いをもたらす苦しみ』(サルヴィフィチ・ドローリス)という書簡で、苦しみの意味についてお話しましたが、それは丁度、まことに寛大に病んでいる人を迎えてくださる、ルルドの聖母の祝日でした。

私が到着する前に、皆さんは聖体祭儀に与られました。リヨンの偉大な司教イレネオは盛んに繰り返したものです。不滅の神は、聖体拝領を通して、キリストの御体を朽ちるべき人間の体の中にお置きになる、と。聖体の秘跡と赦しの秘跡は、キリストが癒しをお望みになっている証拠です。それはキリストのなさった奇跡に現われていました。この二つの秘跡は、神が約束なさった完全な救いの前金です。私たちは顔と顔を合わせて神を見るという、永遠の生命へと召されています。「悲しむ人は幸いである。彼らは慰めを受けるであろう」。これがイエズスのよき福音なのです。(八六・十・五)

信徒の使徒職

1 御存じのように、キリストの秘義を公式に宣言する仕事は、キリスト御自身が「司祭」にお託しになりました。しかし、実際にこの秘義を宣言するにあたって、それは全ての信徒の仕事となります。『教会憲章』31番が教えるように、信徒は、現世の事柄全てを、神の御旨と福音の指示に従って活気づけ、また推し進めよと呼ばれているからです。

そうすることによって、信徒は「主の道を整える」のです。(マテオ3・3参照)すなわち信徒は、地上に正義と平和をもたらすよう努力することと、自らの生活の証とによって、来たるべき主イエズスの秘義と天の国の近いことを、目立たぬ仕方で宣言するのです。

また社会の歴史を、福音の精神で活気づけ、変える、というこの仕事を果たすことで、信徒は、現在の困難や心配事を克服するために決定的な貢献ができます。また、そうする義務があるのです。現在の困難とは文明に関するものです。というのも、現代文明は、超越的なもの、神感覚、正義と慈悲の福音的価値に、私たちが心を開くのを妨げていますから。

2 福音史家聖ルカは、信徒一人ひとりに、キリストの御言葉を世界中に広めよ、そうすることによって人々の心を光と慰めで満たせと教えています。すべての人に福音を宣べ伝えんという熱意を、自分のものとせよと急きたてるのです。人間の心の底から出る種々の疑問、そして望みに、見事に答えるのはキリストであります。人間が望むより遙かに多くのことをキリストは与えてくださいます。罪と死にうち勝った御方は私たちの望みであり救いであります。キリストは、道であり、真理、生命なのです。

ですから、小教区の枠を越えて世界中に目をやり、イエズス・キリスト、人々の友であり救い主である御方を体験するという喜びを味わったことのない人々、そして子供たちにも、関心をよせないわけにはゆきません。

このように(キリストを知らない人々のことを)思うなら、そして彼らのことを気づかうならば、全精力を注ぎ込んで、つまりできるだけ寛大な心で、創造力を働かせ、福音を、よき訪れを、誰にでも伝えるために、あらゆる機会と場をとらえ、または作り出す努力をすべきことがわかるでしょう。(一九八六・十・十六)

体の値うちを再発見しよう

今日私たちは、人間のペルソナとしての尊さと自由、および奪うことのできない人間の権利を、必死になって守ろうとしています。

ところで、貞潔を守ることが、人間の尊さを守り、尊さについての関心を深めることと必然的につながっていることを、みなさんはよく理解しているでしょうか。貞潔や純潔に反する罪が、人間の尊厳を侮辱することであり、生命への攻撃であり、また愛に対する裏切りであることを、納得しているでしょうか。

2 聖パウロは、「淫行者は自分の体を犯す」(①コリント6・18)と教えています。

キリスト教の道徳は、人間の体を感嘆の目で眺め、高く評価しています。聖パウロはテサロニケ人への手紙のなかで(4・4~5)、「おのおのが器を神聖に保ち、神を知らぬ異邦人のように情欲に溺れてはならない」と言っています。人間の体が聖霊の神殿であることについて知らぬ人はないでしょう。

キリスト信者にとって、悪は体の中にあるのではありません。つまり、人間の性が悪いのではなく、体の尊さと性の本来の目的に対する敬いの不足に悪は存在するのです。

悪は、原罪で傷ついた人間の「心」に起こる「欲情」に関係があります。この欲情は本来の善を求めず、他人の体を私用に供することができるものと考えさせるのです。

欲情は、愛から、贈り物としての内的な自由を奪い去ります。ある意味で、愛する人の人格を奪い、利己的な快楽の対象としてしまうのです。

確かに、キリスト教の道徳は時として厳しいものです。しかし、体のうちに悪の原理をみるようなマニケイズム(*註参照)的要素は全く持っていません。キリスト教の道徳が時として、放棄や犠牲を要求するとすれば、それは人間の体を「清める」ため、「高める」ためであり、そうすることによって、人間全体が高められるためなのです。

3 今日の特徴は体の値打ちの再発見であると言われていますが、それは同時に霊(精神)的な諸価値を汚す傾向を伴っています。

ですから、人間自身の二つの面、すなわち霊肉両面をうまく調和させる人間観を、再確認しなければなりません。キリスト教道徳(倫理)が霊肉両面の関係についての諸規定に求めるものこそ、この調和なのです。教会は、神の啓示が与える超越的な展望からインスピレーションを受けています。そしてその超越的な展望とは、世の終わりの復活の時、神の喜びのうちに体が高められ、改めて

説教・講話・書簡等の抄訳

救いの歴史と天使 ④

天使の創造

1 聖書の光に照らされて、教会は、純粋な霊として天使が存在することを、何世紀にも亘って宣言してきました。ニケア・コンスタンチノープル信経で宣言、第四ラテラン公会議（一二一五年）でこれを確認、さらに第一バティカン公会議における創造の教義憲章で繰り返し述べてきたのです。「時間の初めから神は霊的被造物と物質的被造物、すなわち天上と地上との被造界をひとしく無から創造し、次にこれを合わせた霊魂と肉身から成り立っている人間を創造された。」（憲章『カトリック信仰について』DS 3002）言いかえれば、神は初めから両方の実体、すなわち霊的実体と肉体的実体、天使の世界と地上の世界をお造りになったということです。神の法のもとに確立され、時間で測られる世界の枠組の中に、霊魂と肉体からなる人間をお造りになるという意図のもとに、神はすべてのものを同時に創造なさいました。

2 教会の信仰は天使の存在を宣言するとともに、天使が備えている特別の本性をも認めています。純粋な霊的存在である天使は「非物質的」であり「不死のもの」です。（特別な状況のもとで、人間のために何らかの任務を遂行するとき、目に見える姿で現われることもありますが）天使は本来「からだ」をもっていません。従って、天使は全被造界に共通の腐敗性の法則から免れています。主イエズスは天使の特性にふれて次のように仰せられました。来世において復活した人は「もう死ぬことがない、彼らは天使に似たものだから」（ルカ20・36）と。

3 霊的被造物である天使は、知恵と自由意志とをもっており、この点では人間と同じですが、幾分人間より優っています。ただし、すべての被造物には本来限界があるので、天使にも限界があります。また天使は個々の存在（位格を備えた存在―ペルソナをもつ存在）であり、それゆえ神の「似姿」、神に「かたどられたもの」です。聖書は天使と大天使を区別していますが、それだけでなく、ラファエル、ガブリエル、ミカエルといった個々のものを示す名で天使を呼ぶ一方、熾天使、智天使、座天使、能天使、主天使、権天使といった「集合的」な名でも呼んでいます。聖書が類比的、また表象的な性格の言葉を使っていることを考えると、天使は、社会を成しているかのように、役割や完全性の程度に応じて順位がつけられ、階級が決められているという結論に至ります。古代作家や典礼文集も、天使に階級（アレオパゴスのディオニシウスによると九つの階級）があることを伝えていますし、特に教父の時代や中世の神学は、この天使の特性に絶対的価値をおくことはなかったとしても、決してそれを否認せず、教理的なあるいは神秘的な言葉で説明を試みてきました。聖トマスは本体的（存在論的）特質、つまり認識の働きと意志について、また純粋な霊的被造物がもつ「貴さ」について研究を深めました。というのも、天使のもつ「威厳」にふれ、天使の中に純粋な状態の霊にふさわしい知的能力と活動力とを見出したからです。そして知恵、愛、自由、神への従順、神の国への道、といった人間の思考を鼓舞し悩ます究極の問題に、かなりの光明を投じました。

4 私たちがここで扱っているテーマは、現代人の物の見方からすれば「かけ離れたもの」あるいは「たいして重要でないもの」かもしれません。しかし教会は、創造主である神についての真理と、天使についての真理の両方を、すべて誠実に伝えてはじめて、人々に多大な奉仕ができると確信しているのです。確かに、人であり神であるキリストによる神の啓示の中心は、人間であって天使ではありません。これは私たちも信じている通りです。けれども、人間一人ひとりは、肉体だけでなく霊魂をもった存在であること、そして人間のために人間と共に神の摂理に仕える位格的な存在（天使たち）の共同体の中にあって、まことに重要かつ効果的な救いの計画にあずかっていることを明らかに示してくれるのが、純粋な霊的被造物と人間との宗教的な出会いなのです。

5 授かった自由を最初に試されたとき、神と栄光と御国を選んだ純粋な霊は、聖書と聖伝において、彼らにふさわしい「天使」という名を与えられました。この天使たちは神の御前に顔と顔とを合わせ、至福に輝く深みから流れ出る至上の愛に包まれ、至聖なる三位一体の神と交わっています。「天使は天上にいて、常に天にまします父の前に立っている。」（マテオ18・10）　主イエズスはこのように仰せられましたが、「常に父の前に立つ」ことは最高の霊魂と一緒になる、ということなのです。

これは物質（唯物）主義でも快楽主義でもありません。人体の尊さを熟知しているキリスト教道徳であります。マリア・ゴレッティは、体に対して罪を犯さないために、体の生命を放棄しました。マリアは、体にとっての本当の悪が苦しみでないことをよく知っていたのです。（死さえも受け入れましたから。）　本当の悪とは、自分の意志からでる行為（罪）のことです。この場合、体に反して、また生命の目的と生命の伝播に反して犯す意志の行為、つまり罪こそが悪なのです。

貞潔の美しさ

4 現代社会は、マリア・ゴレッティが生命をかけて守った徳の魅力に、もう一度目を向けなければなりません。

貞潔は難しいがどうしても必要な徳です。貞潔の徳がいかに霊的な美しさを備えているかに気づかなければ、貞潔であるための戦いに挑むことは困難でしょう。貞潔を身につけようとすれば、神の恩寵の助けを受けて、勇敢に、辛抱強く、戦わねばなりません。神の恩寵の助けを得れば、人間本性の悪への傾きを癒し、善に向かわせることができるのです。

では、貞潔の実りとは何でしょう。それは、人としての内的な調和であり、寛大で無私の愛であります。つまり、自由な心で、神的・超越的な善の値打ちに対する感受性をもって、内的調和を保ち、本当の愛を示すことができるようになる、ということです。

みなさん、貞潔を、より高貴な戦いの基礎としてください。この戦いの褒賞は体の力ではなく、精神的な力、人としての尊さを完全に手に入れることなのです。感覚の快楽に身をまかせる若者は、このような戦いを準備することも、勝利を得るための基盤を築くこともできないでしょう。

（註＊マニケイズム（マニ教）。マニが始めた宗教で、善悪二元論を教える。善い原理は全て霊的なもの、悪い原理は物質や体に属するもの、とする。彼らのうちの完全者（純粋な者）は知恵をもつとし、結婚、酒、手仕事（肉体労働）を避ける。）

今月のおすすめ

信徒ロ神学と霊性（定価四〇〇円　〒一『〇〇円）
デル・ポルティーリョ著　新田壮一郎訳

祈りと神の現存（定価九〇〇円　〒二〇〇円）
ルナ・イ・ルカ・デ・テナ著　大島・平井・新田共訳

不変の教え

神礼拝を表わしています。これは全宇宙の名のもとに行なわれる「天上の礼拝」です。教会が行なう地上の典礼は、特に頂点に達する瞬間に、絶え間なくこの「天上の礼拝」に与ります。世界中で、毎日、毎時間、教会はミサ聖祭の中心である聖変化の祈りの前に、至福なる神の栄光を歌うよう「天使と大天使」に願います。そして私たちも神を賛美し、言葉では表わせない神の秘義を知り、神を最初に礼拝した天使たちと共に心を合わせて歌います。

6 啓示によれば、栄光に輝く三位一体の神の生命に与っている天使は、神の摂理によって導かれ、人間の救いの歴史においてその役割を果たします。「天使たちは、救いの世継ぎになろうとする人々に奉仕するために送られた奉仕の霊ではないか」(ヘブライ1・14)とヘブライ人への手紙の著者は尋ねています。これは聖書をもとに教会が信じることであり教えることでもあります。これによって私たちは、善い天使の仕事が、人々を守り、人々の救いを切に望むことであると知るのです。

天使に関する表現は聖書のいたる所に出てきます。例えば、詩篇90(91)はすでに何度か引用しました。「主が天使たちに命じ、あなたの道を守られたからだ。足が石につまずかぬよう、彼らがあなたを手で支える。」(11~12)　また主イエズスは、子供たちについて話し、子供たちを侮らないように警告なさる場面で、「この子らの天使」と表現なさいましたし、さらに、キリストを認めたものと拒んだものに対する最後の審判では、天使が証人の役割を担っています。すなわち、「人々の前で私の味方だと宣言する人を、人の子もまた神の天使たちの前で彼の味方だと宣言する。人々の前で私を否む者は、神の天使たちの前で否まれるだろう。」(ルカ12・8~9、黙示録3・5参照)　このように天使が神の審判において証人の役割を担っているとすれば、明らかに天使は人間の命に関与していることになります。終末の話の場面ではもっと強調され、歴史の終わり、キリストの来臨の日、つまり世の終わりに、主イエズスは天使をお遣わしになると書かれています。(マテオ24・31、25・31~41参照)

7 新約聖書、とりわけ使徒行録は、人間と人間の救いに向けられた天使の気づかいを如実に伝えるいくつかの事実を描いています。主の天使によって、使徒たちが牢から出て自由になったこと。(5・18~20)　中でも、ヘロデから殺すとおどかされていたペトロが助け出されたこと。(12・5~10)　また、最初に改心した異教徒の百夫長コルネリオにペトロが働きかけるとき、神の天使によって導かれたこと。(10・3~8、11・1~12)　そして助祭フィリッポがエルサレムからガザに下る道を行くときも、同じように天使に導かれたこと(8・26~29)、など。

このような事実をいくつか見るだけでも、なぜ教会が、天使は人間への使者の務めを託されていると確信し、守護の天使への信仰を告白するかが明らかになります。さらに記念日を定め、典礼でたたえ、「神の御使い」にたえず祈り、その保護を願うよう勧めるかが。「信者はみな、命へ導く教師として、また指導者として、天使を傍にいただきます。」(聖バシリオ『エウノミウス論駁』III, 1; 聖トマス・アクィナス『神学大全』I,q.11,a.3)　この「神の天使」への祈りは聖バシリオの美しい言葉で宝のような祈りになりました。

8 最後に、教会が三位の天使を典礼上でも礼賛していることに注目しましょう。聖書の中で、この三位の天使はそれぞれの名前で呼ばれています。まず、大天使聖ミカエル。(ダニエル10・13~20、黙示録12・7、ユダ9参照)　その名は善い霊がもつ本質的姿勢を表わしています。実際、「ミカ・エル」は「神に似たものは誰か」という意味で、天に在す「御父の御前に立つ」天使の力添えによって私たちは救いに与ることができるという事実を表わしています。二番目は、御子の御託身(受肉)の秘義に特に結ばれているガブリエル。その名は「私の力は神」、「神の力」という意味で、御託身(受肉)が全能なる神の創造の極みにおける至上のものであることを表わしているようです。(ルカ1・19~26参照)　そして三番目は、ラファエルと呼ばれる大天使。「ラファ・エル」とは「神は癒される」という意味です。この名は旧約聖書のトビアの書(12・15~20、他参照)でよく知られていますが、特に保護と世話を常に必要とする神の小さな子供たちをこの天使に委ねることはすこぶる重要です。

このように考えてみると、この三位の天使、ミカエル、ガブリエル、そしてラファエルは、それぞれの方法で、ヘブライ人への手紙の著者の述べる真実を映し出していることに気づきます。すなわち、「天使たちは、救いの世継ぎになろうとする人々に奉仕するために送られた奉仕の霊ではないか。」(1・14)　(八・六)

仕事と祈り

聖体祭儀のなかで耳を傾けた、神の御言葉に注目しましょう。これらは私たちに、ちょっとした考えと心からの望みを与えてくれています。この二つは切り離すことができません。なぜなら、望みは考えの中に、考えは望みの中に、互いに含まれているからです。

福音史家聖ルカはある姉妹について語っています。エルサレムから遠く離れた家にイエズスを御客様として招き入れた、マルタとマリアの話です。過ぎ越しに先立つ日々を含めて、イエズスが招かれたのはこれが初めてではありませんでした。みなさんはすでに何度もこの件を読んでおられ、イエズスがマルタに仰せになった御言葉はよく御存じでしょう。このときイエズスは、マルタの仕事、すなわち日々の心遣いと、マリアの態度、すなわち主の御言葉に聴き入る態度とをお比べになったのでした。

ここには誠に深い象徴的な意味があらわれています。というのも、私たち全員がそれぞれ自らの生活に取り入れるべき価値について、目を向けさせてくれるからです。

このイエズスの御言葉を考えてみると、次のことがわかるのではないでしょうか。私たちの仕事全て、言い換えれば、人間の活動によって成り立っているもの全ては、神の御言葉からくる実りと同じく、それ自体に意味があり、また価値がある、ということが。

他の機会にイエズスは仰せになっています。「人はパンのみによって生きるのではない。神の口から出る全てのことばによって生きる」(マテオ4・4)と。つまり、人は自分の仕事の実りによって生きるだけではなく、同時に、神の御言葉から出るものによっても生きているのです。そして、キリスト者の生活のプログラムがあの有名な二つの要素から成り立っていることに気づきます。すなわち、「祈れ、そして働け」。このプログラムは聖ベネディクトがキリスト教文化・文明にもたらしたものです。「祈れ、そして働け」。聖人のこの言葉は、誠に簡潔でありながら深い意味を秘めています。なぜなら私たちに、人間生活の意味と構造を教えてくれるからです。この二つ、「仕事と祈り」を、上手に組み合わせる必要があります。すなわち私たちは、活動と神の御言葉に聴き入る態度とを、うまく組み合わせなければならないのです。

(一九八六・七・二〇)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393